

第4節 塩部遺跡出土の焼夷弾からみた甲府空襲

1. 焼夷弾の出土

調査を開始して早々の表土剥ぎの段階に、赤錆びた鉄製の筒状のものが地中に垂直に突き刺さって多く出土した。出土する際に変形したものは、中からペンキなどの溶剤のような悪臭を放つドロドロの液体が流れ出すものもあった。数名の年配の調査参加者から、それぞれの体験談を含めて、甲府空襲で投下された焼夷弾であることを聞く。早速、甲府空襲を考古学的に実証するものとして、出土地点を記録することとする。

出土地点を記録したものが第7図である。KAWA2などに集中し、方形周溝墓や住居址がある微高地に少ない。微高地は地盤が比較的硬いために地中深く突き刺さらずに、その後に除去されたものが多かったためと考えられる。出土点数は焼夷弾38点、弾頭が3点である。

焼夷弾の出土地点を線で結んだ結果、北側の4本は北（方眼北）から西へ61度39分、南側の2本が50度34分の角度が得られた。この50～60度の角度が、焼夷弾投下時のB29爆撃機の飛行コースを示しているものと推定できる。

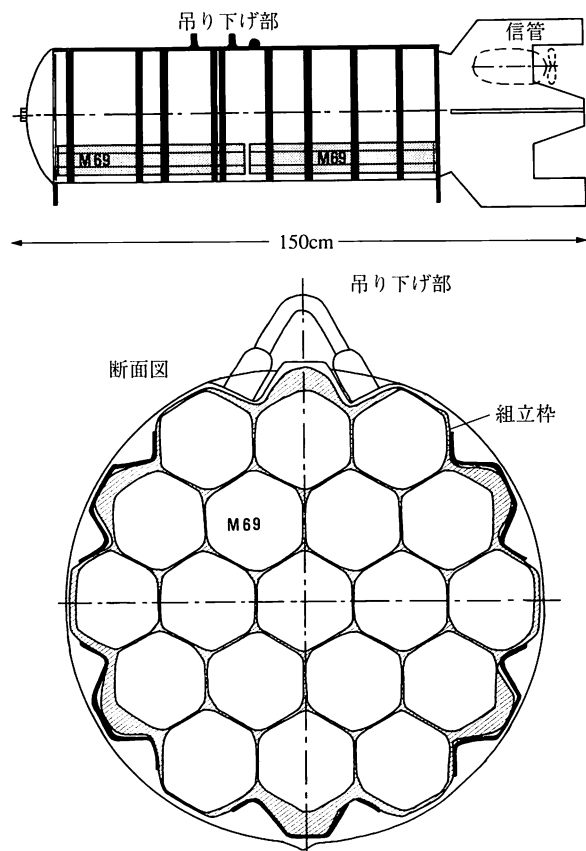
2. 焼夷弾

実測した焼夷弾は、地中深く埋設していたため保存状態がよく、表面に浮いた錆を取り除くと濃緑色の塗装がほぼ残っていた。第8図「M69焼夷弾」1・2は、六角形の筒状で一方のみ底が付いている。落下方向は底面を下にした状態であり、底面付近の側面に信管が取り付けられている。側面中央部には紫色の塗料で「帯」と「NP69」などの記号が読み取れる。また底面には「AN-M69」の刻印と中央部に黒色の塗料による不明瞭な記号が認められる。また図化したものと別個体で、袋状の粗いガーゼの様な布（幅約10cm、長さ約50cm）が、底部と反対側に付いているものもあった。後述の麻製のリボンとされるものである。

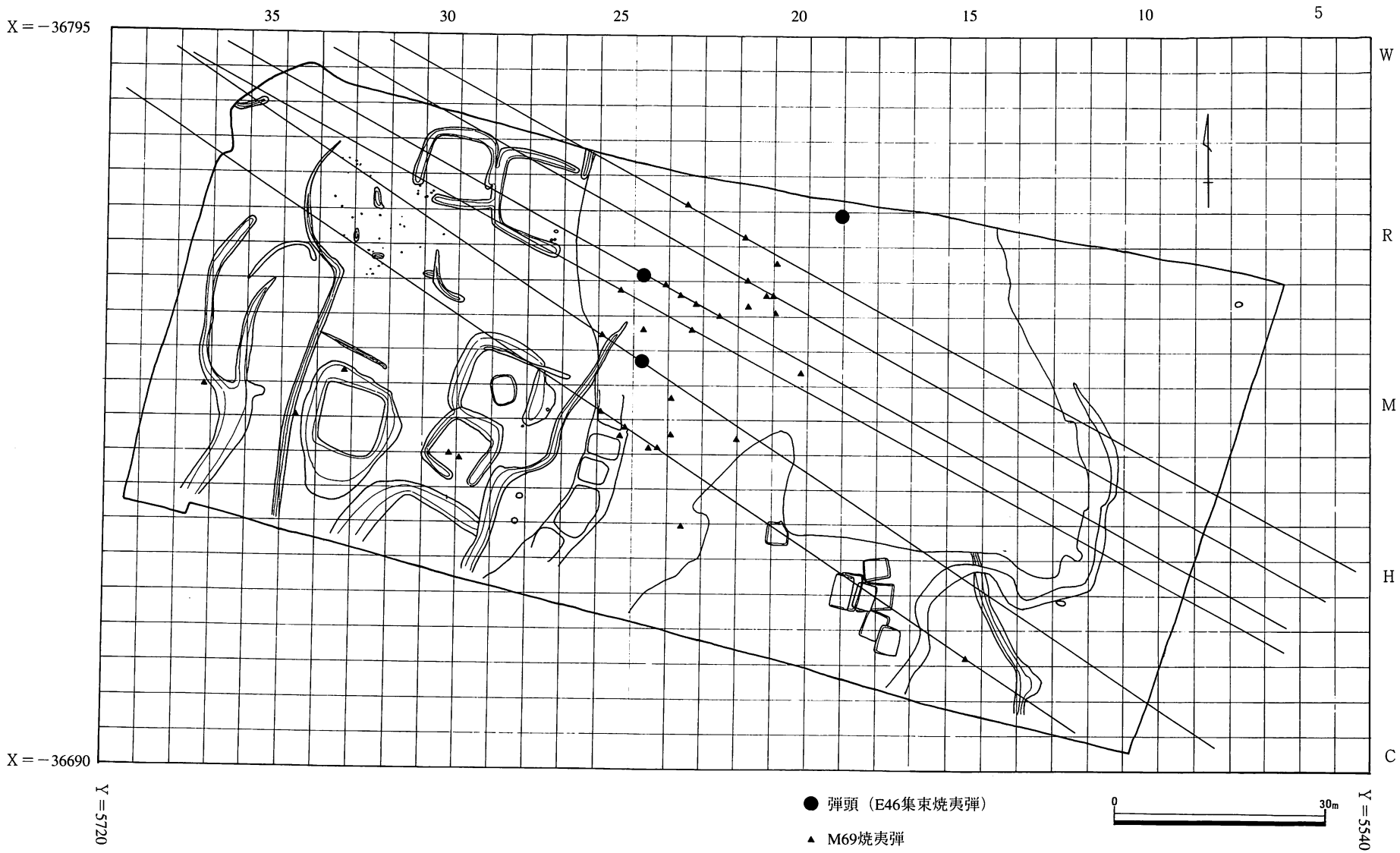
低いドーム状の鉄塊は、「E46集束焼夷弾」の先端の部分であり、投下後に頭を下に向け落下姿勢を安定させるためのものである。「弾頭本体」は31kgにもなる鉄の鋳造品である。本体にボルトで留められていた周囲に切り欠きのある「裏板」は、M69焼夷弾を束ねるための「組立枠」を固定させる部品である（平塚1995）。

この「E46集束焼夷弾」は「M69焼夷弾」が19発づつ2段で計38発を束ねたものである（第6図）。原（1995）によれば、B29爆撃機からは、「E46集束焼夷弾」が横向きに投下され、目標上空で尾部に付けられたプロペラ式の信管により破裂し、頭部、尾部、そして外板6枚の計8パーツに分解され、中のM69焼夷弾が一斉に散開する。M69焼夷弾の尾部には麻製のリボンが折り畳まれた形でついており、これが落下の際の風圧で飛び出し、焼夷弾の姿勢を安定させ、落下速度も制御した。落下したM69焼夷弾は屋根などを突き破り床などに着地、頭部の信管が作動し、その2～3秒後に頭部が爆発、その勢いで中に詰められた油脂が燃えながら尾部から飛散し、壁などに付着して家屋を燃え尽くすという。

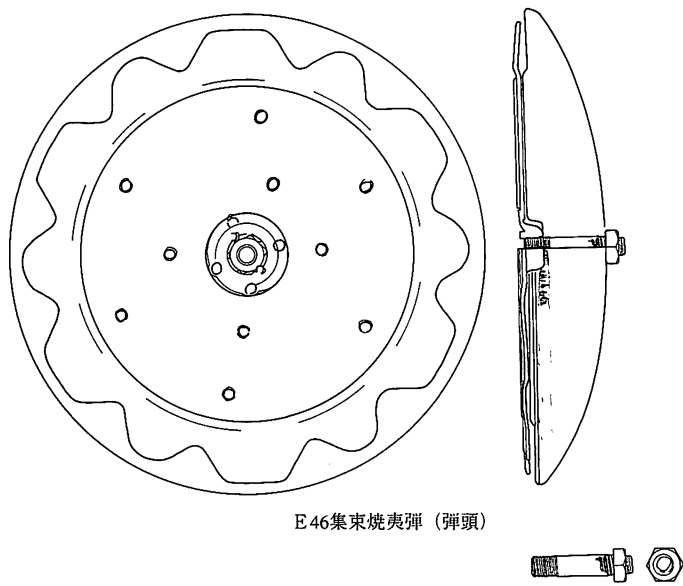
遺跡内から出土した集束焼夷弾の弾頭が3点あることから、少なくともこの範囲に38発×3の計114発が投下されたことが判る。さらに、これらの弾頭がいずれも旧



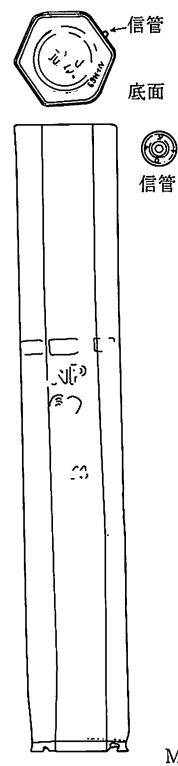
第6図 E46集束焼夷弾



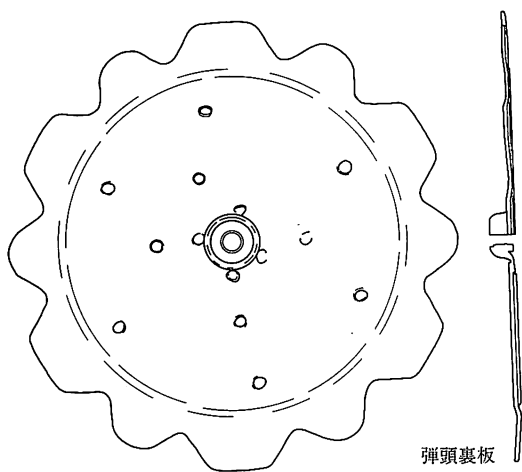
第7圖 燒夷彈分布圖



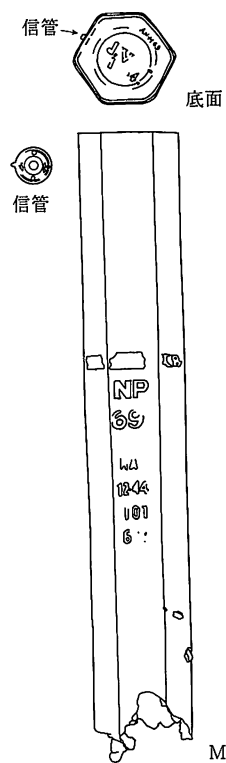
E46集束焼夷弾（弾頭）



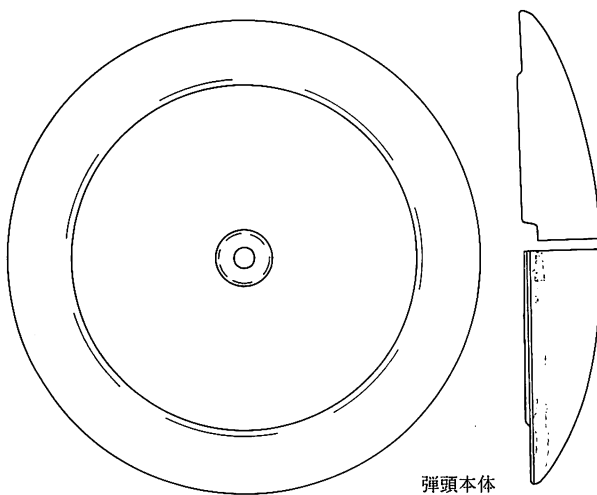
M69焼夷弾 1



弾頭裏板



M69焼夷弾 2



弾頭本体

0 10cm

第8図 焼夷弾・弾頭実測図

河道部の地盤の軟弱な地点からの出土であり、これ以外の部分にも弾頭が投下されていたが、その後回収されている可能性がある。これらを加味して考えると、調査範囲内には5 m×5 mのグリッドに対して、数発が投下されたと推測される。おおまかに想像すると、1グリッドは約15畳の広さであり、普通の小さな家屋でも約3～5発の着弾と概算される。大変な密度と言えよう。

3. 日本側の記録

甲府空襲は、甲府防空本部の発表によれば、昭和20年7月6日午後11時23分警戒警報発令、午後11時54分空襲警報発令となっているが、これより早く空襲ははじまっていたと『甲府空襲の記録』には記されている。

先の記録に収録された複数の回想によれば、目標誘導機による市の北部愛宕山上空への照明弾の投下から空襲は始まり、先ず市北部塚原町方面、続いて愛宕山から愛宕町及び市東部より東南部にかけて攻撃が続けられたという。また、日本軍からは1機の戦闘機も、1発の高射砲の応戦もなかったという。最初に周辺部を囲むように攻撃し、後続機へ目標を与えてかつ市民の退路を遮断してから、市の中心部を攻撃するという絨毯爆撃が、全く無防備の甲府へ行われたことがうかがえる。

このため多くの人々が死傷し、多くの家屋が焼失している。『山梨県政70年誌』によれば、面積4,164,300平方メートル（全市の74%）、人口78,952人（全人口の63%）が罹災。戸数では、17,920戸（全市の68%）。死傷者は、死者826人、行方不明42人、重傷者345人、軽傷者899人、一般戦災者76,840人で計78,952人とされている（松浦1974）。また、『甲府空襲の記録』編さん委員会の調査（昭和49年7月）では、甲府空襲の犠牲者は1127名で、塩部遺跡に近い朝日地区でも40名の犠牲者が出ているとされている。

『甲府空襲の記録』には当時の発掘調査範囲付近の様子をうかがえる回想がある。「まずは安全なところへと塩部田圃へ一目散に駆け出し、湯川に腰までつきながら爆撃の終わるのを待つ。（中略）甲府工業校庭に突き刺っていた焼夷弾の空薬きょうは、正に足の踏み場もないとはこの事、よく自分に当たらなかったと首すじをなで、何よりも先ず弟妹を探す（後略）」（渡辺1974）。

空襲からほぼ30年後にまとめられた『甲府空襲の記録』には、非常に多くの体験者の回想が収録されている。この回想からは、想像を越えた空襲の様子をうかがい知ることができた。しかし、妻子や肉親を亡くされた方々の回想が極めて少ないことが印象に残った。30年後にしても語り得ないものが多くあることが偲ばれる。

4. 米軍側の記録

The United States Strategic Bombing Survey(Pacific War)

合衆国戦略爆撃調査報告（太平洋戦争）

1945年8月15日にトルーマン大統領により命令された調査で、日本に対するすべての航空攻撃とその効果を研究し、将来にわたる航空兵力の開発や国家防衛のあり方を策定するためのものである。この中には、「AIR OBJECTIVE FOLDER No.90-16 Kofu（航空目標フォルダ No.90-16の甲府）」、7／6の甲府空襲に関する Tactical Mission Report（戦術作戦報告）などが含まれている。

1945年7月6日の甲府空襲は、第21爆撃司令部により、一連に遂行された次の5の作戦のひとつである。以下に、戦術作戦報告の一部を抜粋した。

Report of Attacks Against 4 Urban Areas and Precision Target, 6 July 1945

Mission	Target	Wing	Force Assigned
251	千葉市街	58th	4 Groups
252	明石市街	73rd	4 Groups
253	清水市街	313th	4 Groups
254	甲府市街	314th	4 Groups

Target Information Sheet (目標情報票)

甲府 要約

甲府は本州中部の盆地に位置する最大の都市である。耕地は狭く、製糸・紡績・織物などの絹産業の中心として発展している。県庁所在地であり、市の庁舎や国の倉庫などが集中している。

甲府には番号を付けられた目標は存在しないが、中心部への効果的な焼夷弾攻撃は、県庁所在地であり本州内陸部の最大都市の破壊という精神的衝撃が期待できる。また、補充歩兵養成のための練兵場への損害、鉄道中央本線への妨害、深刻な住宅問題などを引き起こすことも期待される。

飛行コース

マリアナ基地（グアム・サイパン・テニアン島に所在）－硫黄島－御前崎－甲府上空－小田原－硫黄島－マリアナ基地

レーダーにて捕捉しやすい御前崎を目標に本土に接近し、つぎは富士山を目標に、甲府を捕らえることが指示されている。

航空・海上救助

飛行コースの各地点に、潜水艦10隻、船舶4隻、飛行艇10機を待機させ、その位置を図示している。

基地離陸 16:30～18:12（日本時間）

甲府空襲 23:47～02:35（日本時間）

13機の目標誘導機によるM47曳光焼夷弾の投下により、種火をつくり、後続に目標を与えた。次に後続の3群に分かれた125機の主力爆撃機によりM69焼夷弾が投下されている。

これは、攻撃対象の甲府市街が、非常に燃えやすいが、十分な防火帯が設けられると評価されていることに対するものとされている。

投下方法

最初の一部が目視照準、その他はレーダー照準

投下した焼夷弾

M47A2 231.9トン

M17A1 7.6トン

E46 731 トン （M69の拡散を目標上空1500mに設定）

計 970.4トン

投下高度

3400～5200m

投下速度

330km/h

損害調査報告

- ・甲府市街の1.3平方マイル（市街の65％）を破壊
- ・住宅地区と商業地区の主要な部分に損害、市の南半はほとんど完全に破壊、北部は分散的な損害
- ・鉄道操車場は損害なし、ただし、操車場すぐ南の建物の50％を破壊

5. 甲府空襲のまとめ

日本側の記録により、予想外の大きな被害を受けたことがわかった。また、米軍側の記録により、とくに軍事的に重要な目標はなく、住宅地区や商業地区などからなる市街を焼き払うことが目的であったことがはっきり

りした。そして、飛行艇・潜水艦・船舶などを待機させ、搭乗員の救助態勢が完備していたこともはっきりした。東京都の例ではあるが、仲村（1994）によると、もし墜落した機があれば、戦後に墜落地点に調査に入り、生存者の有無や生存者への虐待の有無などを調査し、遺体を回収するなどのことが徹底的に実行されたことが判る。これら当初、機密扱いであったが、その後に公開されていたことも注目される。日本では、戦災による消失や敗戦の混乱によるとは言え、十分な記録は残されていない。甲府空襲の犠牲者の数にしても、30年後の調査によりかなりの追加をみているなどかなりの違いである。

最後に付け加えれば、甲府空襲に関わる一部の資料を見たに過ぎないが、日米の戦争に対する文化の違いを感じた。アメリカ側には、たった1日の甲府爆撃に関する100ページに及ぶ写真・図・文書が系統的に保存公開されている。また搭乗員への徹底的な救援体制など計画的に進められている。戦勝国であり、意義ある戦いとして国内でも支持されていたという点を考慮しても、事前の十分な調査と後方支援の充実など実に計画的に実行されている。アメリカは「普通」の業務として実行しているように感じられる。戦争中として無理をする要素はあるにしろ、基本的には彼らなりの論理において合法的に処理されていたように感じられる。戦争中の作戦についても、その妥当性がその国家・国民から問われる社会であったのではないだろうか。

引用文献

- 仲村明子（1994）『国立国会図書館蔵「GHQ調査部法律課による報告書」について』『足立区立郷土博物館紀要』第17号 P1-21
- 原 剛監修（1995）「圧倒、焼死体をひたすら生み続けたM69焼夷弾の威力」『歴史群像』8月号 No.20 1995 P24-27
- 平塚枉緒（1995）「焼夷弾とはどんな爆弾だったのか」草思社『米軍が記録した日本空襲』P78-79
- 松浦総三（1974）「本土空襲のなかの甲府空襲」甲府市戦災誌編さん委員会『甲府空襲の記録』P20-29
- 渡辺 静（1974）「紅蓮の炎が、巨大な竜の舌のように」甲府市戦災誌編さん委員会『甲府空襲の記録』P59-62
- Tactical Mission Report, MISSION NO.251-255, FLOWN 6 JULY 1945, Tactical Mission Reports of the 20th and 21st Bomber Commands, Records of the United States Strategic Bombing Survey, Compiled by Marilla B, Guptil and John Mendelsohn, National Archives and Records Service, General Service Administration Washington 1975, 国立図書館憲政資料室所蔵
- AIR OBJECTIVE FOLDER No90-16 Kofu, No90-18 Shizuoka, No90-21 Hamamatsu JAPAN, Aerial Photographs of Japanese Targets 1944-45, Records of the United States Strategic Bombing Survey, Compiled by Marilla B, Guptil and John Mendelsohn, National Archives and Records Service, General Service Administration Washington 1975, 国立図書館憲政資料室所蔵